清水梁山と曹洞宗大学・駒澤大学

奥野光賢

（一）

私はかつて駒澤大学図書館の編纂になる『禅籍目録』（駒澤大学図書館、一九二八年）刊行に至るまでの経緯を、駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室より刊行された『駒大史ブックレット「図書館誌」にみる駒大図書館史』[1]を資料として論じたことがある[2]。その際、期せずして清水梁山（一八六四―一九二八）[3]が当時の曹洞宗大学（のちに駒澤大学）に講師として出講していたことを知ることとなった[4]。しかし、上記拙稿ではその内容の性格上、わずかに清水出講時に曹洞宗大学において惹起していた授業料問題に触れたのみで、それ以上の言及をすることはしなかった。

その後、気懸かりにはなっていたものの、手をつけることなくいたずらに時が流れてしまったが、幸いにも仏教学部教授会の理解を得て、昨年度（平成三十年度）駒澤大学在外研究員として立正大学において国内研修を行なう機会に恵まれたので、ここにあらためて「清水梁山と曹洞宗大学・駒澤大学」について、前記『駒大史ブックレット「図書館誌」』を中心にこれを論じてみたいと思う。

なお、題名を「曹洞宗大学・駒澤大学」としたのは、清水の本学への出講が大正十四年（一九二五年）大学令により「曹洞宗大学」から「駒澤大学」へと改称した前後にまたがるためであるとご理解いただきたい。

（二）

清水梁山は『法華論』（『妙法蓮華経優波提舎』）の本邦初の国訳者[5]として知られているが、その一方「天皇本尊論」[6]を唱えたことでも著名である。「天皇本尊論」を唱えたことからも推知されるように、清水は日蓮宗内では異端の宗学者と見なされたせいか、彼に対する研究は同時代に活躍した田中智学（一八六一―一九三九）や本多日生（一八六七―一九三一）のそれに比して少ないように思われる[7]。もとより

本稿は清水のそうした面の解明を志向するものではなく、あくまで「曹洞宗大学・駒澤大学」を舞台とした彼に関わる一端を明かそうとするものに過ぎない。

とはいえ、清水に関する研究を瞥見しておくことは、本稿にとっても無意味ではないと思われるので、遺漏の多いことを恐れるが、まず最初に私の知る限りにおいて最近の清水に対する研究を一瞥しておきたい。

第一に、近時の清水に対する研究の特筆すべきものとしては、大谷栄一氏による

①大谷栄一「清水梁山の生涯と思想」（上杉清文・末木文美士責任編集、シリーズ日蓮5『現代世界と日蓮』Ⅱ第2章「国家・国体と日蓮思想2」春秋社、二〇一五年）

をあげることができる。大谷氏には他に

②大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』（法蔵館、二〇〇一年）

③大谷栄一『近代仏教という視座』（ペリカン社、二〇一二年）

の著書もあり、そのいずれにおいても清水に対する言及が見られる。特に②には清水が田中智学、本多日生と並んで写っている貴重な写真が掲載されており注目される（一七二頁、図7）。

ところで、①大谷論文は氏自らが文中に明記しているように、清水梁山述（岡本一乗記、岡本天晴編）『日蓮聖人の本尊』（岡本春月、私家版、一九九三年。のちに隆文館）に収録された山脇正隆「清水梁山師のことども」、岡本天晴「あとがき」、作成者不明「清水梁山師年譜」を重要な参考資料として用いている点が注意される。[8] この『日蓮聖人の本尊』については、のちにあらためて触れたい。このほか清水に関する研究として、

④西山茂「近代天皇制と日蓮主義の構造機関―国体をめぐる「顕密」変動」（西山茂責任編集、シリーズ日蓮4『近現代の法華運動と在家教団』Ⅰ総論第一章、春秋社、二〇一四年）

⑤執行海秀「近代日蓮教学の形成」（望月歓厚編、法華経研究Ⅱ『近代日本の法華仏教』第二篇第一章第一節、平楽寺書店、一九六八年）

をあげておきたい。⑤は特に一人清水に限らず、この分野の古典的研究として知られるもので以後多くの研究者が研究の立脚点としているものである。清水が曹洞宗大学・駒澤大学に出講していたことも、すでにこの執行論文において言及されていたが（二六五頁）、前記拙稿執筆の時点では私は恥ずかしながらこの執行論文の存在をまったく知らなかった。それはともかく、清水の曹洞宗大学出講は、大谷①における伝

記区分に従えば、晩年の第Ⅳ期に相当する（一三四頁）。

（三）

さて、「図書館誌」のページをめくると、清水は曹洞宗大学図書館に対してしばしば書籍の寄贈や現金の寄付をしていたことが知られる。すなわち、

ⓐ【その1】三六頁、「大正七年十一月二十二日」の條に、
本学講師清水梁山師ヨリ日遠上人草稿立正会立義一帖・同上人真跡授戒法則一帖寄贈セラル

とあるほか、次のような記録を認めることができる。（以下、強調文字部分は奥野）

ⓑ【その1】四三頁、大正九年四月二十四日の條
本学講師清水梁山氏より**菩薩戒疏註三冊**を寄贈せらる

ⓒ【その2】一七頁、大正十一年三月十三日の條
清水梁山先生より図書購入費として金五円寄贈せらる、次後毎月同額の寄附をなし下さると不堪感謝

ⓓ【その2】二二頁、大正十一年六月十七日の條
講師清水梁山氏より其著**日本の国体と日蓮上人**（ママ）（一名**王仏一乗論**）一冊を寄贈せらる

ⓔ【その2】二三頁、大正十一年六月二十一日の條
清水梁山師より藤原親房の著**元元集**（一部八冊）と称する珍本の寄贈を受く

ⓕ【その2】四二頁、大正十二年三月十日の條
井上耕哉師よりハ結婚記念として図書購入費五十円を寄贈せらる、昨年度ニ於て清水梁山先生より四拾五円を、また本年二月十九日山本祖岳師より金五十円を寄贈せられたると共ニ本館として殆んど前例なき所深く感謝の意を表す（傍線部＝奥野）

ⓖ【その3】四二頁、大正十四年十二月十一日の條
本化聖典大辞林三冊を購入し、清水梁山氏寄贈金を以て支払ひ同氏寄贈本としての手続を履行す

また清水没後のことではあるが、

ⓗ【その5】四六頁、昭和三年八月六日の條には、
清水とよ氏より梁山先生遺著**日蓮宗綱要**一部を寄贈せらる

との記録も見える。

寄贈図書の中では、現在駒澤大学図書館が貴重書指定している身延山久遠寺二十二世心性院日遠上人（一五七二―一六四二）の真跡とされる『授戒法則』と『立正会立義』[9]が注目される。なお、両書は駒澤大学図書館電子貴重書庫において容易に披見することができるので参照されたい[10]。

「法則」[11]とは「法要において導師が簡単な旋律をつけて読み上げる式文」[12]とされるから、『授戒法則』は授戒の法会の際に唱えられる式文というほどの意になるであろう。『授戒

法則』に関連する先行研究としては、寺尾英智氏により次のようなきわめて貴重な成果が示されている。

⑥寺尾英智「中世日蓮宗における出家受戒について」（『日本仏教学会年報』第七五号、二〇一〇年）

⑦寺尾英智「史料紹介　茂原市藻原寺所蔵『出家法則』『受持之法則』―中世日蓮宗における出家受戒の資料―」（伊藤瑞叡博士古稀記念論文集『法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房仏書林、二〇一三年）

寺尾⑥論文は、中世の日蓮宗における出家受戒の具体的な作法について、身延山久遠寺十一世行学院日朝（一四二二―一五〇〇）の『雑々抄』および日朝の弟子で同寺十二世円教院日意（一四四四―一五一九）の『出家法則』を資料として検討したものである。[13] 寺尾⑦論文は、⑥論文の姉妹編と言えるもので、⑥では紙幅の関係から『出家法則』の中の「出家受戒法則」のみの翻刻紹介だったものを、詳細な書誌解題を付して『出家法則』の全文を翻刻紹介したものである。

ところで、立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学章疏目録』（東方出版、改訂版、一九七九年、初版は一九一八年）には、日朝の項に「・受戒法則　一　正本清水梁山」（六五頁）とあり、『受戒法則』を行学院日朝の書としている。しかし、おそらくこれは『宗学章疏目録』の誤認であって、ここに言う『受戒法則』がいま問題としている『授戒法則』と同じものであることはほぼ確実なことであると思われる。[14] 『日蓮宗宗学章疏目録』の刊行は一九一八年（大正七年）三月のことであり、すでに見たように清水の寄贈は同年十一月二十一日のことであったから（記述ⓐ参照）、かりに両書が同じものであるとすれば、同目録の刊行後あまり時を経ることなく該書は当時の曹洞宗大学図書館に寄贈されていたということになる。

『授戒法則』は残念ながら二丁目裏と三丁目表（電子貴重書庫の画像ではNo.5）を欠いているが、[15] 冒頭にはおそらくは清水梁山の筆になると思われる次のような一文が付されている。いま、これを駒澤大学図書館の「書誌情報」よりそのまま引いておきたい。[16]

此帖は昔し　養珠大夫人　剃髪の式文授戒法則　甲州身延山　心性院日遠上人　真跡なるか故に星霜おしうつり　滅裂せん事を恐れ　標工に観して　是を帖となし浮戒の観者に告る与なん

もしこの書が心性院日遠上人の真跡ならば、伝えられる日遠上人と養珠院お万の方（一五七七―一六五三）との関係からして、[17] この書は貴重な資料的価値を有するのではないかと思われ、ここに報告するとともにその真贋の鑑定も含めて、専門家による調査とご教示を切にお願いしたいと思う。

（四）

さて、すでに見たように清水の曹洞宗大学の講師就任は大正四年（一九一五年）七月のことであったが、『立正会立義』と『授戒法則』を寄贈した一九一八年は、清水と本学の関係にとってきわめて大きな転換点になった年のようで、この年から清水は本学の学内誌に精力的に論考を発表するようになる。次の如くである。

㋐「日蓮聖人と道元禅師（上）」（『禅学雑誌』第二二巻第六号、六月号、一九一八年）

㋑「日蓮聖人と道元禅師（中）」（『禅学雑誌』第二二巻第七号、七月号、一九一八年）

㋒「日蓮聖人と道元禅師（下）」（『禅学雑誌』第二二巻第八号、八月号、一九一八年）

㋓「国際上の地雷火」（『第一義』第二四巻第二号、二月号、一九二〇年）

㋔「新たなる模範道場」（『第一義』[18]）

㋕「龍樹入滅年代に就いて」（『第一義』第二五巻第二三号、一二月号、一九二一年）

㋖「叡山の円戒と永平の禅戒」（『第一義』第二七巻第八・九合本号、一九二三年）

㋗「叡山の円戒と永平の禅戒」（『第一義』第二八巻第八・九合本号、一九二四年）

（＊《参考》『国訳大蔵経』に収められた「国訳妙法蓮華経優波提舎」の発表は一九二一年）

先行研究により、清水は師である日蓮宗一致派初代管長、新居日薩（一八三〇―一八八八）を批判し破門されたことが知られているが[19]、論文㋓の冒頭には次のように述べる自伝に関する述懐があり貴重である。

十年一昔しと云ふが、これは今から四十一年前、明治十二年、予が十六歳の時、突如一通の書置を遺して恩師新居日薩和尚＝当時日蓮宗管長＝の許を脱走した、そしてその揚句ニコライの門に入って希臘教の洗禮を受けた、その顛末はかうである。（五九頁）

ところで、清水は大正十年（一九二一年）五月に行なった「日本国に対する日蓮聖人の理想」と題する講演の冒頭で（以下、清水梁山講述『国体五講』名古屋、日本教報社、一九二四年。四六―四七頁）、

数年前東京の日蓮主義の学校を受持ち、夫れから諸所の学校に関係が出来て一時は、日蓮と天台宗の大学と宗教大学、夫れから此の境野さん[20]（前席講師）の学校へも、一寸御手伝をしたことがあります。禅宗曹洞宗の学校へもと云ふやうなことで飯を喰ふのに電車の中で麺麭を嚙ったと云うやうな忙わしいこともありました。

此の欧米の今度の大戦に就きまして、少しく感ずる処がありまして筆を執って書きたいと思ひ立ち前に申したやうな総ての学校関係を辞して居ります。而して今日では、只だ或る仕事の便宜上曹洞宗大学に一週間に二三時間参る外は一切如何なる場合でも公衆の前で講演をするの、世の中に立って世の人々と共に動くのと云ふことは書き上げる迄は絶対にやらぬ考へで、東京の或る所へ引込んで暮して居りました。[21]（傍線部＝奥野）

と述べて、その最晩年は本学のみに出講していたことを伝えている。このことは前に見た図書館への書籍の寄贈や金子の寄付の件と合わせて、ことのほか清水が本学に好意を寄せていた証左かと思われる。文中に言う「或る仕事」とは、遷化のために果たし得ず、没後門弟によって出版されることになる『日蓮宗綱要』[22]を指すのであろうか。

それはともかく、「総ての学校関係を辞し」清水が全力を傾けて取り組んだと推知されるのが論文㋐㋑㋒であり、そしてその総括が「曹洞宗大学」から「駒澤大学」へと改称された翌年の大正十五年（一九二六）四月十一日から毎週、水・金の二回、一回二時間づつ計三十回にわたった行われた「日蓮聖人の本尊」に関する講義であったものと思われる。そしてその講義録が、のちに門弟によって次の二著としてまとめられることになるのである。[23]

⑧田辺惜道監修『日蓮聖人世界統一の本尊』（慈龍閣、一九三〇年）

⑨清水梁山述（岡本一乗記、岡本天晴編）『日蓮聖人の本尊』（岡本春月、私家版、一九九三年。のちに隆文館[補注]）

いま煩を厭わず、論文㋐および⑨『日蓮聖人の本尊』の冒頭部分を引いて、そのそれぞれに賭ける清水の意気込みのほどを聞いてみよう。なお、⑧『日蓮聖人世界統一の本尊』に寄せられた高橋善中の「例言」によれば、「その本論の本尊論よりは特に日蓮聖人の弘安四年の聖筆に係る「国体擁護の曼荼羅」を奉掲して講ぜられた」（二頁）という。

論文㋐

果して然らば日蓮聖人には全く親鸞上人に対する破斥無きか、道元禅師に対する批判無きかと云ふに決して然らず、遺文の面にこそ無けれ其意は滾々として泉の如く湧きて遺文の全篇に溢れり、この意を明らむるは則ち吾等末弟たるものゝ大任なり、黙然としてこの大任の大功徳を吾等に遺し給へる慈哀は寧ろ感泣すべからずや、親鸞上人に対しては予曾て浄土真宗論なる一巻を著して之を同人の間に頒てり、（明治三十七年三月出版）、而して道元禅師に就ては今日まで未だ之を公にする機を得ず、

偶ま曹洞宗大学より招致せられて日蓮宗綱要を講ずること、なり、本学年に於て教相門第三権実相対の下、禅天魔の部の終りに特に日蓮聖人と道元禅師と題して聊か日蓮聖人の意を披露し得たることは実に喜悦に堪へず、講ずるところは時間に制定あれば未だ十分に尽くさゞれども端は已に発せり底を傾くるの時亦近きに在らむ、今その一二節を録して之を同大学の雑誌に寄することは前年以来論文の嘱望太だ切なるに応ずるなり。

由来日蓮宗の学者が道元禅師を解せざりしことは事実なり、而して曹洞宗の人が日蓮聖人を解せざりしことも亦事実なり、両者互に闇くして盲人相搏つ、何の時か仏日の光輝を期せむ、此の如きは畢竟日蓮聖人の末弟にして日蓮聖人を解せざるが為めに非ざる歟、道元禅師の遺孫にして道元禅師を解せざるが為めに非ざる歟、若しよく自ら解せば輙ちよく他を解しなむ、他を解せざるは自を解せざる罪なり、予の窃に観るところを以てすれば道元禅師は名を曹洞に藉るも曹洞宗に非ず、随って達摩禅に非ず、寧ろ反って法華妙禅をその心髄と為したりと言はむと欲するなり、即ち日蓮聖人と道元禅師とは唯法華妙禅の上に於けるの同異なることを堅く信ずるなり、而して予はまた曹洞宗の人々の是の如く信ぜられむこと切望して止まざるものなり、換言すれば道元禅師の真の遺孫たるものは達摩禅の標榜を撤廃するに在り、曹洞宗の宗名を破棄するに在り、言はゆるその単伝は法華妙禅の心法なることを公然表示するに在り、然らざれば道元禅師をしてまた永く天魔の黨魁たらしめむ、是れ豈にその祖に孝なるものならむや。」（四八四―四八五頁、傍線部＝奥野、後半の圏点は原文ママ）

⑨『日蓮聖人の本尊』

今日から日蓮宗の本尊を説く。日蓮宗といっても、現在日蓮宗と称している日蓮宗の意味ではない。日蓮聖人の建て給う所の日蓮宗である。現日蓮宗の中には八派九教団があって、本尊論が大問題となり、先頃も新聞や雑誌の上でやかましく論争したようだ。日蓮聖人が宗旨を御建立せられてから、すでに六百数十年になるが、まだ本尊がわからぬ。変てこなものだ。自分は、これに就いて別に考えがある。日蓮宗各教団より全く違うところがある。これを此の大学で講ずる。―近頃身体が年を老って弱り、寒い冬がいけないから夏のうちにこの講義を完結するつもりだ。夏だけ出てくる蚤の先生が一人出来たと笑われた。ところが社会学とやらの建部博士[24]は冬になって寒くならないと出られないそうだ。これで虱の先

生がまた出来たと大笑いしたことだ。（あは、〳〵〳〵。）

さて、本尊の問題は単に日蓮宗という一宗派の問題ではない。そんな小さな問題ではない。念仏でも真言でもまた曹洞宗にも関係のあることだ。仏教全般を通じての大切な問題である。近く総持寺の新井禅師[25]も本尊に就いて筆を執るとか……。また前学長丘宗潭師もかつて学生諸君に「本尊がわからぬようではいけない」と言われたそうだ。そんなわけで本尊論の話には諸君が仏教を研究する上にも参考になるのは勿論のこと、帰命すべき本尊を信解して、そのみ光を頂いたがよい。（同書一五―一六頁）

ところで、いったい誰が清水を曹洞宗大学に招聘したのかは興味のあるところであるが[26]、同書には引用文中に見える丘宗潭（一八六〇―一九二一）[27]と清水との次のようなやり取りが記録されていて興味を引く。

大正九年八月、丘師は大患に罹り、自坊の伊豆修善寺にも帰山できず、大学にて危篤に陥り、殆ど死亡通知までも準備するに立ち至った。その時丘師は今一度梁山師に面会したしとの使いを遣して来た。梁山師はその発病時より見舞われて居たのであったが、その希望を聞き直ちに病床を訪（ママ）われた。臨終は今かと思われるばかりの重態であった。その時の問答は次の如くであった。

丘師問「日蓮宗では死んだら何処へ行きますか。」

梁山師答「霊山。」

問「霊山何処ぞ。」答「此処。」

問「何が故ぞ。」答「仏身遍きが故に仏土又遍し。」

問「南無妙法蓮華経と唱うるは往生の為なるか、成仏の為なるか。」

答「往生の為めと言うべからず、成仏の為めというべからず、これ仏願仏行なり。」

すると、その重態の丘師は、側近の者に起こしてくれと命じ唱題三返、安らかな気持になられた。梁山師は病室を辞去せられる時、「丘さん、あんたは死にませんよ。」との一言を残された。病床に侍していた人々は、皆奇異の思いにうたれたが、果たせる哉、病気は快癒され、一年半存命し（大正十年八月十七日没）、その間熱心に日蓮聖人の御遺文を研究されたということである。

その病床に列しておった丘師の法嗣、後の修善寺住職丘球学[28]氏竝びに当時の教学部長大林禅戒（ママ）[29]氏は、この希有なる事実を記し加判して遺すことになったが、その後事情ありて遂に果たされなかった。（同書、山脇正隆「清水梁山師のことども」四七一―四七二頁）[30]

（五）

教学に関わることだからであろうか「図書館誌」は上述の清水の講義のことなどについてはまったく触れることなく、ややしばらくページをおいて清水臨終時の様子を次のように記録している。

ⓘ【その5】一六頁、「昭和三年二月十日」の條に、

司書は本朝出勤後間もなく清水先生重態との通知を受け急ぎ帰宅、此日午後先生ハ六十五歳を一期として遂に化を他界ニ遷さる、彼の教界稀ニ見る一偉材を失った事、並ニ先生が畢生の身血（ママ）を濺ぎ執筆中なりし一大著述も完成するに至らずして逝去せられし事ハ誠ニ遺憾の極みである

ここに言う「司書」とは小川霊道（一八九〇―一九六五）[31]のことで、記述全体から小川の清水に対する痛切な哀惜の念が伝わってくる内容となっている。そして文中の「先生が畢生の身血（ママ）を濺ぎ執筆中なりし一大著述」とは、すでに見た記事ⓗの『日蓮宗綱要』を指すことは疑いないであろう。さらに小川による「図書館誌」の記録は次のように続く。

ⓙ【その5】一七頁、昭和三年二月十二日の條、

清水先生の告別式行はれ、信徒に対し、田辺惜道氏法統相続の旨宣言す

ⓚ【その5】一七頁、昭和三年二月十三日の條、

故清水先生の一般告別式にて司書ハ欠勤せり

ⓛ【その5】三〇頁、昭和三年四月二十四日の條、

司書ハ清水家の依頼を受け、役場及区裁判所行の為午後欠勤

ここでは、告別式が二回行なわれたということ、そして早くも告別式において「法統相続の旨宣言」がなされたということがわかる。しかし、何と言っても重要なのは記事ⓛである。この記録からは、小川が清水家の全幅の信頼を受けていたことが読み取れる[32]。なぜなら、「依頼を受け、役場及区裁判所行」ということは、よほどの信頼と信用がなければ、普通では考えられないことだからである。そして、かかる一連の流れから言わば必然的に小川は清水の蔵書について清水家から相談を受けることになる。すなわち、次のような記述を認めることができる。

ⓜ【その5】五二頁、昭和三年九月二十八日の條、

清水梁山先生遺書取扱につき相談を受く、購入予定書につき在否取調をなす

ⓝ【その5】五三頁、昭和三年十月十二日の條

故清水梁山先生蔵書全部を館ニて一時預かること、なり先方より持参す、其紙包み個数八十五個

これによれば、図書館が清水家から遺書（蔵書）の取扱に

ついて正式に相談を受けたのは没後半年を過ぎた昭和三年（一九二八年）九月二十八日のことであり、そしてほどなくして蔵書すべてをいったん図書館で預かっていることが知られる。その数、包み紙にして八十五個であったという。

しかし、その取扱（蔵書引受購入）は難航をきわめたようで、以後しばらく「図書館誌」にはこの件に関する記録は見られなくなる。そして再びこの件が登場するのは、最初の相談から約一年半を経た昭和五年（一九三〇年）四月になってからである。次の如くである。

ⓞ【その6】三八頁、昭和五年四月十六日の條、
清水本中の未蔵目録を造り、光山学監[33]ニ申告す

ⓟ【その6】三八頁、昭和五年四月十七日の條、
阡陌氏に故清水先生蔵書目録の複製を依頼す

ⓠ【その6】四三頁、昭和五年五月二十九日の條、
故清水先生蔵本購否決定ニ付、清水とよ氏来訪ニ付、光山学監を訪ね交渉す、其結果兪々購入ニ決す

取扱（蔵書引受購入）が難航したのは、疑いなく図書館の図書購入費の問題が影響していたからで、当時の駒澤大学図書館の図書購入費はわずかに五千円[34]に過ぎなかった[35]。そのため図書館では清水旧蔵本のすべてを一括購入して引き受けるのではなく、重複調査をなし、そのうえで図書館未所蔵本に限って引受購入することにしたようである。そして以後、小川は重複本について、その売却に奔走することになるのである。以下、その間の記録を摘録してみよう[36]（以下、傍線部＝奥野）。

ⓡ【その6】四六頁、昭和五年六月十九日の條、
清水先生旧蔵書整理に着手し大体重複本と未蔵本を区別す、午後清水とよ氏を招く

ⓢ【その6】四七頁、昭和五年六月二十一日の條、
磯貝君ハ清水本の重複目録等を作る

ⓣ【その6】四九頁、昭和五年七月三日の條、
清水本売却ニ付松雲堂、村口、北沢、井上等の書店と交渉す

ⓤ【その6】四九頁、昭和五年七月四日の條、
北沢書店員来訪、清水本の一部につき調査をなす、此夜清水とよ氏へ清水本代月賦払第一回分を支払ひ、同時に総価格は追て協定願ひたき旨申出づ

ⓥ【その6】五〇頁、昭和五年七月十一日の條、
光山学監に面会し、清水本売却交渉顛末を報告し了解を仰ぐ、更ニ本年度ハ明十二日限り執務切上げニ決せし旨報告す、北沢書店員来学、其結果司書は井上書店へ急行す

ⓦ【その6】五一頁、昭和五年七月十七日の條、
約束に従ひ、松雲堂主人店員と共に来訪し、目録と対

照し蔵経以外の分を引取る、これニて清水本の重複分全部を処分し終る、依て清水とよ氏へ希望二任せ八百円を渡す、本月分と合せ九百円となる、同時に総価格に於て五十円値引を願ひ、一千三百五十円と協定す、為に本館購入分ハ予定通り一冊一円平均となる

以上から明かなように、小川が光山学監の了解を得て（記述ⓥ参照）、最終的に重複本を売却し終えたのは昭和五年（一九三〇年）七月十七日のことであった。すでに清水没後、約二年半の歳月が流れていたことになる。

ところで、記述ⓦより書店が示した清水の蔵書の評価額は一千三百五十円で、そのうち重複本を除いた本学図書館の買い取り額は四百五十円であったことがわかる。[37] すでに見たように当時の本学図書館の図書購入予算は五千円であったから、実にその予算の約十分の一を充てて、清水旧蔵本を購入していたことになる。小川の尽力のほどが偲ばれて余りあろう。

（十六）

ともあれ、こうした経緯で清水梁山の蔵書の一部は本学図書館に収められることとなった。国内研修も終わりに近づいた平成三十一（二〇一九年）一月、私は図書館の特段のご高配によって、当時の受入台帳を閲覧する機会を得た。[38] 以下、別掲資料として示すのが、台帳に記された清水梁山旧蔵本一一六部総冊数三四五冊のリストである。[39]（配列ほか、記載は台帳通り。請求記号は駒澤大学図書館の請求記号である。図書館の台帳は横書きであったが、今回の資料は縦組みとした。）

本学が受け入れた清水旧蔵本には、清水が『法華論』国訳の際に参照していたであろう刊本や道元禅師に論究した折に利用したであろうその方面の関連書籍が含まれていないが、すでに述べたようにこれは図書館では既所蔵本との重複調査を行なった上で引受購入の措置を取っていたためであると思われる。そのため清水旧蔵本のもともとの全体像を知ることができないのはきわめて残念なことであるが、それでも清水の研究範囲（読書範囲）を窺い知る一端とはなるであろう。遺憾ながら私は清水旧蔵本の資料的価値を評価する能力を欠いており、最後にこの方面に関する識者のご教示をお願いして本稿を閉じることにしたい。

＊文中、清水梁山師、小川霊道師等については一部敬称を省略した。ご理解を賜りたい。

なお、本稿は平成三十年度駒澤大学在外研究成果の一部として報告するものである。受入先の立正大学仏教学部の寺尾英智先生（当時は仏教学部長）、則武海源先生に

は国内研修をするにあたってさまざまな便宜を与えていただいた。記して心より御礼申し上げたい。

（二〇一九年六月二十三日）

注記

（1）駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室『駒大史ブックレット5「図書館誌」にみる駒大図書館史【その1】』（二〇〇六年三月）～『駒大史ブックレット10「図書館誌」にみる駒大図書館史【その6】』（二〇一〇年十月）を参照。上記『「図書館誌」にみる駒大図書館史』（以下「図書館誌」【その1】等と略す）は、駒澤大学学術機関リポジトリ「駒大史ブックレット5」～「同10」において披見することができる。http://repo.komazawa-u.ac.jp/ を参照。

（2）拙稿「駒澤大学図書館と禅籍目録」（『駒澤大学仏教学部論集』第四四号、二〇一三年）を参照。

（3）『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、一九八七年）は清水の生没年を一八六五―一九二八年とするが、のちに見る清水梁山述（岡本一乗記、岡本天晴編）『日蓮聖人の本尊』（岡本春月、私家版、一九九三年。のちに隆文館）に収録された「清水梁山師年譜」は一八六四―一九二八年としているので本稿もこれに従う。

（4）駒沢大学百年史編纂委員会編『駒沢大学百年史』上巻第一編第八章「付　創立以来の旧職員名簿」（駒沢大学、一九八三年、四四七頁）によれば、清水の曹洞宗大学・駒澤大学への出講は「大正四年七月～大正一五年」までである。

（5）清水梁山「国訳妙法蓮華経優波提舎」（『国訳大蔵経』論部二〇、国民文庫刊行会、一九二一年）を参照。なお、清水の国訳に関する最近の研究として、桑名法晃「『法華論』版本の研究―清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として」（『身延山大学東洋文化研究所紀要』第二〇号、二〇一六年）がある。

（6）清水梁山『日本の国体と日蓮聖人　一名、王仏一乗論』（慈龍窟、一九一一年）を参照。なお、のちに見る大谷論文①でも注意されているが、清水前掲書に先立つ清水梁山「日本国の祖先と法華経」（『雙榎学報』第一輯、一九〇三年）には次のような記述が認められる。「予は今不肖を顧みず謹で聖人の御義に遵ひ敢て試みに左の一大断案を下さむ。日本皇室の祖先は印度霊山に於て釈迦牟尼に教化せられたる法華経の行者が釈迦牟尼の告勅を奉じ遙に来たりて特に此の国土の経営を為し給へるものなりと。此の断案は甚だ大胆至極なるに似たれども、細かに日本国の上古を按ずるに其の『神族』の言語と云ひ、風俗と云ひ、当時の印度、即ち仏経上に散見せられたる印度と極めて相ひ接近して、幾ど同一なる点少なからざるものあればなり」（一三頁）。この論文では続いて、「今日本国上古の言語にして全く梵語なるものを左に表示せむ」（一四頁）として諸例を掲げているが、これがまったくの誤解にもとづくものであることは池田道浩氏にご教

示いただいた。記して御礼申し上げたい。また、清水の「天皇本尊論」については、戸頃重基『近代社会と日蓮主義』「Ⅱ近代日蓮主義のあゆみ」（日本人の行動と思想18、評論社、一九七二年、一六六―一六七頁）もあわせて参照されたい。

（7）一昨年（二〇一七年）六月に東北大学で開催された第二五回日本近代仏教史研究会のシンポジウム「近代法華仏教研究の新たな展開」（シンポジストは大谷栄一、ユリア・ブレニア、ジャクリーン・ストーン、佐藤弘夫、岡田正彦の各氏）の内容が掲載された『近代仏教』第二五号（二〇一八年五月）を興味をもって一瞥したが清水に対する関説は残念ながらなかった。なお、このうち、大谷氏とブレニナ・ユリア氏の論稿は、加筆されて『法華仏教研究』第二七号（二〇一八年）にそれぞれ大谷栄一「近代法華仏教研究の成果と課題」、ブレニナ・ユリア「田中智学と本多日生の日蓮主義考」として収録された。

（8）大谷氏はすでに②『近代日本の日蓮主義運動』（法蔵館、二〇〇一年）においても、山脇正隆「清水梁山師のことども」を資料として用いている（同書、二一六頁を参照）。また、氏は③『近代仏教という視座』においては、清水を「日蓮主義」の創唱者田中智学とともに日蓮主義第一世代に配当している。同書、二二四―二二五頁を参照。前注（3）の「清水梁山師年譜」によれば、清水の大教院（立正大学の前身）の同門に田中智学が在籍していたという（四八四頁）。

（9）立正会立義とは、身延山久遠寺十一世行学院日朝（一四二一―一五〇〇）が創始した立正会（講会式）の際に行われた論議のことである。寄贈された当該資料は「教相」と「四種三昧」の問題について扱っているようである。なお、身延文庫典籍調査会編『身延文庫典籍目録』（身延山久遠寺、二〇〇三年四月）の「立正会問答」の項を参照。

（10）駒澤大学図書館のホームページのトップ中央にある「電子貴重書庫」をクリックし、書名を入れて検索。検索結果画面をクリックすれば画像を閲覧することができる。なお、日遠には『自誓受戒作法』の著作もあり、立正大学古書資料館に「寺町三条上町　藤田庄右衛門」の刊行になる刊本が蔵されている（請求記号、A108/104）。その冒頭には次のようにある。

元和第六龍集庚申閏臘月初八
於甲州大野山本遠寺発願次依
梵網疏並授菩薩戒儀等諸文草之

これによれば、本書は元和六年（一六二〇）に甲州大野山本遠寺で草されたものであることがわかる。上文に言うように、『菩薩戒義疏』（大正蔵四〇、No.一八一一）、『授菩薩戒儀』（大正蔵七四、No.二三七八）、特に後者からの引用が多く見られる。本書閲覧にあたっては、立正大学古書資料館に格別のご高配をいただいた。記して御礼申し上げたい。大野山本遠寺については、後注（17）を参照。

（11）私は駒澤大学図書館の書誌情報にしたがって「ほうそく」と読んでいたが、立正大学の庵谷行亨先生より「ほっそく」と読むのが正しいとのご指摘をいただいた。記して御礼申し上げたい。ちなみに『国書総目録』第四巻（補訂版、岩波書店、一九九〇年、二九六頁）でも「受戒法則」（じゅかいほっそく）として採録していた。なお、『国書総目録』が拠ったのは『日蓮宗宗学章疏目録』であるが、『日蓮宗宗学章疏目録』の記述に関してはのちに述べたい。

（12）⑦寺尾英智「史料紹介　茂原市藻原寺所蔵『出家法則』『受持之法則』―中世日蓮宗における出家受戒の資料―」（伊藤瑞叡博士古稀記念論文集『法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房仏書林、二〇一三年）六〇一頁を参照。

（13）日朝の『雑々抄』、日意の『出家法則』は、ともに神奈川県立歴史博物館編『特別展　鎌倉の日蓮聖人　中世人の信仰世界』（図録、日蓮宗神奈川県第二部宗務所、二〇〇九年）にそれぞれ126『出家法則』（一一六頁）、127『雑々抄』（一一七頁）として写真が紹介されているので参照されたい。ともに寺尾英智氏による解説文が付されている。同書一七九頁を参照。

（14）寺尾論文⑦の（注5）に「なお同書の日朝の項には「受戒法則」が掲げられているが（六五頁）、本書との関係は未詳」とある「受戒法則」がいま問題としている『授戒法則』にあたると思われる。なお、寺尾論文がいう「本書」とは、日意の『出家作法』を指す。『日蓮宗宗学章疏目録』が「日朝」の項で著録するのは、おそらく「日遠」の単純な誤認であろうと思われる。同目録の閲覧にあたっては、立正大学仏教学部の神田大輝氏に便宜を与えられ、またご教示もいただいた。記して感謝申し上げたい。

（15）欠落部分（画像No.5）には「三二・一二・一六」というメモ書きの紙片が貼られている。昭和三十二年に調査したときのものであろうか。

（16）書誌情報も前注（10）の電子貴重書庫において披見できる。

（17）心性院日遠上人と養珠院お万の方との関係については、影山堯雄『日蓮教団史概説』第三期多難時代「慶長法難」（平楽寺書店、一九五九年。九五―九七頁）および『日蓮宗事典』（日蓮宗宗務院、一九八七年）の「おまんのかた　お万の方」の項（四六三頁）を参照。日遠上人開山、養珠院日心（お万の方）開基になるのが山梨県南巨摩郡の大野山本遠寺である。なお、心性院日遠に関しては、望月歓厚『日蓮宗学説史』（平楽寺書店、一九六八年）第三篇第六章「心性日遠の教学」および上田本幸「心性院日遠の著作と教学思想について」（上田本昌博士喜寿博士論文集『日蓮聖人と法華仏教』山喜房仏書林、二〇〇七年）を参照した。

（18）この論稿の存在は前注（3）『日蓮聖人の本尊』に掲載された作者不明の「清水梁山略年譜」によって知ることを得たが、大学図書館では見つけることができず私はまだ実見できていない。

（19）清水が破門された原因は日薩の師である優陀那院日輝（一八

〇〇―一八五九）の教学を批判したためであるとされるが、茂田井教亨氏と北川前肇氏との対論、「法華経と日蓮の信仰について」（茂田井教亨『日蓮の法華経観』（佼成出版社、一九八〇年、二六七―二六八頁）には次のような記述がある。「私は優陀那さんの学問的気迫は凄い、尊重しなくてはいけないと思うんです。ただ日蓮聖人のことになると、どっこい日蓮聖人はそうじゃないと言うんです。だから、この頃悪いけど、優陀那さんのことを書く時『惜しいかな先師、宗祖を知らず』なんて言ってしまうんです。だけど、それを言い出したのは清水梁山さんなんです。明治の初年、新居日薩さんが生きている時にそれを言い出した。『和上のはあまりに観念論にすぎる、信心論じゃないじゃないか』といったので、新居薩師が破門する」。これによれば、教学的面からの清水の評価はこれからなのであろうと思われる。

(20) 境野黄洋（境野哲、一八七一―一九三三）のこと。この講演が行なわれた当時、境野は東洋大学学長であった（境野の学長就任は一九一八年）。したがって、講演の中にある「境野さんの学校」とは東洋大学を指すであろう。

(21) 前注（3）『日蓮聖人の本尊』の岡本天晴「あとがき　清水梁山師略伝」（四七六頁）およびこれを受けたと思われる大谷論文①（一三九頁）は「駒沢町一二七番地」に居を構えたとする。黒田壽太郎編『荏原名勝、附地図』（翠紅園、一九二四年）によれば、当時の駒澤村は「字を上馬引澤、下馬引澤、野澤、深澤、弦巻、世田谷新町に分つ」ていたようである（同書、六六頁参照）。ところで、田辺惜道監修・高橋善中編纂・清水梁山師講述『日蓮聖人世界統一の本尊』（慈龍閣、一九三〇年）の奥付には編輯兼発行者として、「田辺惜道　東京府下駒澤町字新町一二七」とある。これを本学図書館地図室に所蔵される昭和五年（一九三〇年）東京府駒澤町発行の五千分之一の地図『東京府荏原郡駒澤町』（請求記号、291.3/72）で確認してみたところ、「駒澤町字新町一二七番地」は大学からほど近い大学正門から歩いて五分ほどの、国道二四六号線をはさんで現在の駒沢郵便局のちょうど真向かい付近であったようである。

(22) 清水梁山（高橋善中編纂）『日蓮宗綱要』（丙午出版社、一九二八年）。ちなみに丙午出版社からは次のような各宗の「綱要」が出版されている。前田慧雲『天台宗綱要』（一九一九年）、前田慧雲『三論宗綱要』（一九二〇年）、齋藤唯信『華厳学綱要』（一九二〇年）、秋野孝道『禅宗綱要』（一九二〇年）、鈴木法琛『真宗綱要』（丙午出版社、一九二一年）、加藤秀旭『浄土宗綱要』（丙午出版社、一九二四年）、権田雷斧『密教綱要』（一九三七年）。また丙午出版社に関しては、大谷栄一「高嶋米峰と丙午出版社」（『宗教研究』八三巻第四号、二〇一〇年）、同「丙午出版社と近代仏教出版文化」（『宗教研究』八四巻第四号、二〇一一年）を参照。ところで、『日蓮宗綱要』を編纂した高橋善中は、「本書出版に就いて、清水龍山師より懇切なる励ましを受けたり、且つ師の

直話によれば本書は初め師が高嶋居士より是れが執筆を依頼されしものなりしを、師や之を辞して特に我が恩師先生を推されたるものなりと云へり、高嶋居士は既に我が恩師の著『日蓮より観たる親鸞』をも出版されて居れど、併し居士の本書を請はれしには斯る事由のあるものにて、それに依りて我が恩師先生の御執筆さるゝ処となりしなり、然れども其の完成を見ることの出来ざりしは甚だ遺憾なりしが、今これを補輯し出版するに就いて龍山師より寄せられし御厚意切なる励ましも、畢竟これ又宗門の為め斯る所以の存せられしが故なり、此処にその御厚意に深く感謝の意を表するものなり。」（例言、二―三頁）と述べて、『偽日蓮義　真日蓮義』（東福寺・須原屋書店、一九一六年）を著わし清水と激しく対立していたとされる清水龍山（一八七〇―一九四三）に謝辞を述べているのが注目される。

（23）二つの講義録が刊行されることとなった経緯については、後者②の「はしがき」（岡本春月）と「あとがき」（岡本天晴）に詳しい。なお、清水の「本尊論」については、山川智応『本門本尊論』（龍吟社、一九三七年。三九〇―四〇九頁）において批判がなされている。

（24）わが国における最初の社会学の大系を樹立したといわれる東京帝国大学教授建部遯吾（一八七一―一九四五）のこと。前注（4）『駒沢大学百年史』第一編第八章「付　創立以来の旧教職員名簿」（四四三頁）によれば、建部の本学出講は途中途切れることはあったものの、明治三十六年から昭和十六年に至るまでの長きにわたっている。

（25）總持寺独住五世、新井石禅（一八六四―一九二七）禅師のこと。新井禅師の貫首就任は大正九年（一九二〇年）。

（26）前注（22）の『偽日蓮義　真日蓮義』の中に「次月號に慶應大学にて演じたと云ふ三種の神器に就ての文句の中に」（二五一頁）という記述が見えたので、慶應大学関係で忽滑谷快天（一八六七―一九三四）との関係なども探ってみたが何ら手がかりは得られなかった。あるいは後注（29）に見る大森禅戒だったのであろうか、いずれにしても詳細は不明とせざるを得ない。

（27）丘宗潭については、熊本英人稿「近代の禅僧①《曹洞宗系》」（『大法輪』二〇一八年六月号）を参照。

（28）曹洞宗大学副学監、永平寺後堂、總持寺西堂などを歴任した丘球学（一八七七―一九五三）のこと。

（29）曹洞宗大学学監、曹洞宗教学部長、駒澤大学学長、曹洞宗管長等をつとめた大森禅戒（一八七一―一九四七）のこと。

（30）山脇氏の稿は、「ご在世中の直話、弟子等の覚書、新聞（日本教報）、雑誌（唯一仏教、十日会月報）、その他、見出されるままに筆録したもの」（前注（3）『日蓮聖人の本尊』四四九頁を参照）とされる。

（31）小川霊道については、前注（2）の拙稿「駒澤大学図書館と『禅籍目録』」の注（17）を参照されたい。

(32) 小川が清水家より信頼を寄せられていたことは、「図書館誌」の次の記事からも読み取れる。すなわち、【その2】六八頁、大正十三年六月十一日の條には「清水梁山夫人より図書館奏者としての候補者推挙を受く、其旨を残し理事山形県に赴く」とある。これによれば、清水夫人は小川に対して図書館での人事面での配慮を求めていることがわかる。

(33) 前注（4）『駒沢大学百年史』第一編第八章「付　創立以来の旧教職員名簿」（四四八頁）に記される「光山覚音」のことであろう。

(34) 「図書館誌」には図書購入予算が五千円にしか過ぎないことに対する憤りにも似た次のような慨きの記述が見られる。すなわち、【その5】六七頁、昭和四年二月六日の條に「京城帝大司書関野真吉氏来館視察の上諸事調査せらる、購入費は年額廿五万円の由、僅ニ一万円の購入費を半減せられんとしつゝある本館とは桁違ひなりし」、同じく【その5】六九頁、昭和四年二月十五日の條に「図書購入費は宗務院の議にて金五千円ニ半減され如何とも手段なし」とあるを参照。

(35) 『値段史年表：明治・大正・昭和／週間朝日編』（朝日新聞社、一九八八年）によれば、慶應義塾大学の昭和二年の授業料が百四十円、昭和十六年のそれが百六十円、早稲田大学の大正十四年の授業料が百四十円、昭和十年のそれが百六十円であるから、昭和三年当時（一般的な）大学の授業料はおおよそ百五十円程度であったと思われる。現在の私立大学の平均的な授業料を約百万円と仮定すれば、当時の貨幣価値のおおよそを推定する目安とすることができるであろう。

(36) 以下に参考までに本文に摘録しない「図書館誌」の記述を掲げておく。

i 【その6】四九頁、昭和五年七月五日の條、
井上書店主来館、清水本全部につき取調べ本学購入分、並ニ売却予定書ニ付それぐ見積書を提出す

ii 【その6】四九頁、昭和五年七月七日の條、
北沢書店員来訪、清水本中重複分買受け見積書を提出す

iii 【その6】五〇頁、昭和五年七月八日の條、
松雲堂店員来館、清水本買受見積書を提出す、他の井上、北沢の両書店と殆んど差違なし、彼等ニ於て事前何等かの申合せをなしたるやに思はるゝ程の一致ぶり、驚くの外なし

iv 【その6】五〇頁、昭和五年七月十二日の條
井上書店ニ数回電話をかけしも要領を得ず閉口す

v 【その6】五〇頁、昭和五年七月十三日の條、
司書は午前七時井上書店ニ赴き、主人に面会交渉せしが、一昨夜来古書店同志ニて打合せを了せしものか、五日来館其際ニ於ける談話とハ全然異り北沢書店と同一の返答をなす

vi 【その6】五一頁、昭和五年七月十五日の條
司書神田松雲堂に行き交渉せし処、同店ニてハ蔵経を三百

円に見積り、其他を四百五十円にて引取るとの返答を得し故、即座に腹を定め、同店をして蔵経以外の分を引取らしむる事ニ約束す、帰来直に電話ニて北沢井上両書店に断りの挨拶をなす

vii【その6】五一頁、昭和五年七月十六日の條

本朝北沢書店より電話あり、事務所ニてハ昨日断りの電話をかけし事を知らず待ち居る旨返答せし由、為に北沢書店員ハトラック持参、清水本引取ニ押かく、折柄桑原君来り合せし故、同君と司書応接し、既二他店と交渉成立ニ付、昨日断りある旨を以てせしも先方ハ容易ニ了承せず、折衝の結果、未決の蔵経を同店ニ譲る事とし茲ニ円満解決す、これニより館ハ井上、松雲堂、北沢の三店中の最高見積額七七〇円より一三〇円を利し、九〇〇円を得ること、なれり、

（37）この金額はのちに本稿本文で見る本学図書館の受入台帳に記載された金額と一致している。

（38）閲覧にあたっては、情報サービス係の廻路子氏、情報資料係長（現在は情報サービス課長）中島鈴恵氏、情報サービス課長（現在は運営課長）鈴木英子氏の助力を得た。記して御礼申し上げたい。

（39）受入台帳に記された受入日は昭和五年（一九三〇年）六月二十七日となっていた。本文に示した記述⑨に明らかなように小川が光山学監の了解を得て、未所蔵本を購入することが決まったのが五月二十九日のことであったから、その約一ヶ月後に受入登録を開始していたことになる。なお、清水旧蔵本の中には「時中日董」の蔵書印のある次の三書が含まれていた。『冠導開目鈔』（開目鈔見聞、請求記号333.4-10-1）、『報恩鈔見聞』（請求記号333.4-4-1）、『撰時鈔見聞』（請求記号333.4-13-1）。「時中日董」とは、新居日薩門下の一人で日蓮宗管長もつとめた小林日董（一八四八―一九〇五）のことである。

（補注）岡本天晴「日蓮宗」（大久保良峻編著『新・八宗綱要』法蔵館、二〇〇一年、所収）は、清水梁山述『日蓮聖人の本尊』を参考にして記されたものであることが明記されている（前掲書二六八頁参照）。

【追記】

＊「清水梁山年譜」によれば、清水師の墓域は川崎市東生田安立寺に定められたと記されてある（⑨『日蓮聖人の本尊』四八五頁）。二〇一八年五月四日、思い立って墓参のため私は同寺にお参りした。ご墓所は悠然と流れる多摩川が一望できる同寺裏山の高台にあった。門弟高橋善中によって記された墓碑には以下のような銘文が記されてあった。なお、墓参の際には安立寺ご住職木田隆正師に親切にご対応いただいた。記して御礼申し上げたい。

清水梁山日師聖人墓記

聖人ハ元治元年十月二十日東京府下入間ノ郷神代村ニ生ル考ハ清水琢三妣ハ喜代子幼ニシテ出藍之誉アリ九歳ノ時池上ニ至リ当時日蓮宗管長トシテ名声高キ新居日薩師ニ投ズ十三歳大教院ヲ出デ諸宗ノ教旨ハ勿論惟神ノ奥義ヲ極ム明治二十年名古屋ニ開教日蓮大聖人ノ題目受持一行法幢ヲ掲ゲ一宗ノ覚醒ス二十二年帝国憲法ノ発布セラルルヤ立正安国論ノ上奏ヲ意図シ日本仏教ノ維新ヲ主張セラル三十八年池上ニ宗乗ヲ講ズ四十余年惟一仏教団ヲ創立シテ本化ノ教学ヲ発揚シ進デ聖祖門下各派ノ合同ヲ図リ一般宗教ノ統一ヲ期ス猶王仏一乗ノ元旨ヲ以テ国体ノ大義ヲ宣揚シ大正三年更ニ国諫ノ祖意ニ基キ曼荼羅ノ大要ヲ奉献シ給フ晩年ソノ本尊ノ深義ヲ闡明シ諸ノ弟子ニ付法シテ昭和三年二月十日示寂セラル時ニ御年正ニ六十有五嗚乎コノ御一代ノ弘法洵ニ是レ宗祖大聖人ノ垂応トモ謂ツベシ聖人嘗テ詠ズラク多摩川の辺りに我も生れきて同じ高嶺の月をみるかなト歌旨深遠世ノ迷妄ヲ照シテ余アルベシ茲ニ謹デ記シ奉ル

〈裏面〉

皇昭和九年二月十日建立

末弟善中謹記

〈キーワード〉清水梁山、法華論、授戒法則、曹洞宗大学、駒澤大学図書館

【資料1】『第一義』第24巻第1号（1920年）より

年　新　賀　謹

大正九年一月元旦

曹洞宗大學教職員

丘宗潭　忽滑谷快天　大森禪戒　原田祖岳　大森知言　高田儀光　雨宮憲石　兒玉介舜　佐藤泰曹　山上源賢　木村泰壽　字井伯應　衞藤即道　清水龍　中根環堂　若守義光　鈴木宗忠　富谷龍溪　福益三　保玉泉　村上專精

年　新　賀　謹

大正九年一月元旦

曹洞宗大學教職員

高楠順次郎　建部遯吾　福來友吉　岡本忠之丞　紀平正美　宇野哲人　島地大等　清水梁山　加藤秀旭　鷲尾順敬　森莊三郎　加藤咄堂　赤羽俊良　沼澤龍雄　田中鶴林　増田宗順　高野佐三郎　鈴木廣武　中澤直治　松山陽太郎

（位次不同）

【資料２】　大正期の「曹洞宗大学卒業アルバム」より

①

②

【資料3】〔駒澤大学図書館所蔵清水梁山旧蔵本〕

分類	番号	書名	著者名	冊数	出版	出版地及発行所	枚頁
384.4	1	浄土十疑論	隋智顗（多田孝泉校）	1			12
319	8	作持門詞句要集	等空	1			40
316.9	3	末法開蒙記（二巻）	釈雲照	2	明治29年（1896）	東京　森江作七	116
293	5	浄業課誦附録	寶洲	2	安永7年（1778）	京都　沢田吉左衛門	57
395.3	9	真宗百題（二巻）	忍阿・法梁共著	2	嘉永2年（1849）		84
293	6	蓮門六時勤行式附小子訓	観隋編	1	安政4年（1857）	江戸　縁山蔵版	17
363.1	3	祖書録外微考	日好	2	明治15年（1882）	京都　村上勘兵衛	62
363.1	16	祖書拾遺和語記（二巻）	日性編	2	明治16年（1883）	京都　村上勘兵衛	49
369	W.1	妙宗先哲本尊鑑（二巻）	村上有信編	3	明治17年（1884）	京都　村上勘兵衛	108
319	7	三聚戒本		1	寛政13年（1801）	京都　著屋宗八	89
357	10	法界次第初門（三巻）	隋智顗（智者大師）	3	天保2年（1831）		154
353.1	48	止観義例随釈（六巻）	宋処元	6	宝永2年（1705）	京都　武村市兵衛等	302
242.4	5A	摂八転義論（五巻）	法住（智幢）	2	明和6年（1769）	京都　中村宗左衛門	111
369	2	峨眉集（二巻）	日深（常在院観如）	20	文化11年（1814）	京都　村上勘兵衛	630
209	17	三界義	源信（恵心僧都）	1			54
354.6	3	依憑天台集（略名依憑集）	最澄（伝教大師）	1			16
373	3	大日経義釈捜決抄（一二巻）	仁空（実導）	12	文政8年（1825）	京都　貝葉書院	976
353.1	40	摩訶止観科解		26			1735
353.1	11	法華玄義科文（一〇巻）		17			1178
353.1	30	法華文句科解（一〇巻）		23			1465
223.2	10	弘化改刻本化高祖年譜攷異（三巻）	健立・日諦・玄得・日耆共編	3	弘化4年（1847）	京都　村上勘兵衛	167
223.2	9	弘化改刻本化高祖年譜	健立・日諦・玄得・日耆共編	1	弘化4年（1847）		52
363.1	9	祖書綱要冊略（七巻）	日導・日寿	7	享和2年（1802）	京都　村上勘兵衛	470
363.1	12	御書和語式（五巻）	日相	5	延宝9年（1681）	京都　村上勘兵衛	260
363.2	2	観心本尊鈔見聞（八巻）	日朝（行学院）	7	明治29年（1896）	写本	225

353.3	10	註法華経(一〇巻)開分、結分	日蓮	10	延宝9年(1681)	京都　鶯鵲堂	440
222	3	三国高僧略伝(三巻)	小林是純編	3	明治13年(1880)	東京　須原屋茂兵衛	116
374.22	2	輪円具足梵字譚	龍潮	1	宝暦5年(1764)本後刷	京都　村上勘兵衛	10
363.4	14	三重秘伝抄(大巻抄第一)	日寛、日応註	1	明治37年(1904)	東京　法道会	56
363.4	12	増補御義口伝抄(二巻)	日蓮、日与編、釈日正補	2	明治17年(1884)	東京　村上勘兵衛	114
360	9	本宗綱要	小林日至、本多日生共編	1	明治29年(1896)	東京　妙満寺派宗務庁	164
363.3	W.1	立正安国論見聞	日朝(鏡澄)	2	明治32年(1899)	写本	144
363.4	10	開目鈔見聞	日朝(鏡澄)	2	明治32年(1899)		
363.4	8	冠導開目鈔(二巻)	日蓮	1			
363.4	4	報恩鈔見聞(二巻)	日朝(鏡澄)	1			
363.4	13	撰時鈔見聞(二巻)	日朝(鏡澄)	1		写本	91
363.4	6	開目鈔	日蓮	1		写本	26
671.1	T.52	李氏五種合刊	清、李兆洛	12	清、光緒14年(1888)	上海　掃葉山房	
254	5	無量義経註(三巻)	最澄(伝教大師)	3	寛文10年(1670)本後刷	京都　村上勘兵衛	89
254	4	開経科文	最澄(伝教大師)	2	慶安5年(1652)本後刷	京都　村上勘兵衛	49
254	3	正法華経(一〇巻)	西晋、竺法護訳	3	寛文11年(1671)	江戸　宝蔵院(鉄眼版)	285
253.1	28	金剛経集解(四巻)	宋、楊圭編	4	寛永20年(1643)	京都　中野是誰	221
353.1	33	法華文句随問記(一〇巻)	日遠	12	寛文9年(1669)	京都　武村市兵衛等	1017
356	13	冠導台宗二百題(一五巻)	藤谷恵燈編	5	明治28年(1895)	京都　法蔵館	1006
369	6	御本尊の座配に就て	風間随学	1	大正7年(1918)	東京　風間聖人表彰会	68
363.1	4A	録外考文(八巻)附微考	日耀編、日董冊	1	大正1年(1912)	東京　日蓮宗全書出版会	1009
363.4	1	本尊論資料　二編	久遠寺編	2	明治41(1908)、42年(1909)	山梨　祖山学院出版部	584
364.3	10	本門本尊論	清水龍山	1	大正14年(1925)	東京　隆文館	246
363.1	13	祖書鑽仰	祖山学院同窓会編	1	明治39年(1906)	山梨　祖山学院同窓会	547
363.3	2	立正安国論(略名、安国論)	日蓮	1	明治43年(1910)	東京　日蓮宗全書出版会	331
368	7	真宗教と真国家	山川伝之助編	1	大正15年(1926)	東京　天業民報社	354
362	53	日蓮宗史要	磯野本精	1	大正3年(1914)	東京　日宗新報社	211
393.1	1	行巻に顕れたる帰命釈	藤守暁明	1	大正14年(1925)	京都　為法館	445

368	6	国難降伏論（天の巻、現代の立正安国論）	高鍋日統	1			1
237	42	佐渡　聖史劇	田中巴之助（智学）	1	大正10年（1921）	東京　天業民報社	254
234.2	1	法華天台両宗勝劣抄	日薩（精進院、字深園）	1	大正2年（1913）	兵庫　本門法華宗聖教刊行会	406
369	7	醒悟園叢書　巻二　著作集	日臨（本妙）島智良編	1	大正4年（1915）	山梨　醒悟園	205
362	3	原文対訳　日隆聖人全集	同書刊行会編	4	大正14年（1925）～	東京　御聖教刊行会	2556
352	4	慈眼大師全集（二巻）	寛永寺編	2	大正5年	東京　寛永寺	1665
362	2	充治園全集	日輝（優陀院、字堯山）	6	大正11年（1922）～	東京　宗典刊行会	25667
402.5	35	祖神垂示天照大神宮（二二巻）	川面凡児	1	大正15年（1926）	東京　社団法人稜威会出版部	468
辞4	1-17	陀羅尼字典	円山達音編	1	明治31年（1898）	東京　森江佐七	147
242	7	悉曇十八章建立私験		1	貞享3年（1686）	写本	67
242	2	悉曇十八章双紙		3	明治15年（1882）	写本	128
364.3	6A	宗教要解（二一巻）	日賢（智朗）	6	明治30年（1897）	東京　大檀林	404
238	14	涅槃像考文抄、附涅槃像座談		1		古刊本	53
388.2	4A	顕浄土伝戒論　附一	聖冏（西蓮社了誉）	1		護法窟蔵板（版？）	13
364.3	9	法華安心録羽翼	日暁	1	元禄15年（1702）	京都　小佐治半右衛門	55
360	8	宗門綱格	日乾（寂照、字孝順）	1	寛政4年（1792）	京都　村上勘兵衛	26
364.3	8	読経要義（二巻）	通誠	2	天明1年（1781）	大阪　梶村某	130
223.2	8	元祖化導記（二巻）	日朝（鏡澄）編	1	寛文6年（1661）	京都　栗山弥兵衛	47
363.1	15	祖書綱要正議（二巻）	日輝（堯山）	2	明治3年（1870）	京都　村上勘兵衛	101
363.2	1	観心本尊鈔私見聞（別名、日常見聞）	日常（常忍坊）註	1	延宝8年（1680）本後刷	京都　村上勘兵衛	34
363.4	15	当家宗旨教機時国名目（二巻）	日実	2	延宝8年（1680）本後刷	京都　村上勘兵衛	111
363.1	17	御書編集考（別名、祖書編集考）	日麑	1		京都　村上勘兵衛	7
223.2	12	日蓮上人註画讃鈔（五巻）	日澄（字、啓運）	3	寛永9年（1632）本後刷	京都　村上勘兵衛	57
363.1	14	祖文纂要		2		写本	94
402.4	7	転輪聖王章	乗因	1	天明4年（1784）	写本	48
363.4	7	冠註開目抄（二巻）		1		写本	30
363.4	5	開目抄（聞書）		1		写本	57
363.4	9	開目鈔下分		1	慶安1年（1648）	写本　可伝書	30
364.3	14	琢磨抄		1	天保15年（1844）	写本	27

364.4	11	本勝篇		3			192
363.4	11	金口相承		1	寛政4年（1792）	写本	28
355.6	22	名別義通鈎		1	宝暦9年（1759）（跋）	写本	10
377	1	霊雲寺開山浄厳和尚応公団義需宗門説	浄厳	1		写本	11
727.4	W.85	禁裏仙洞名目鈔（二巻）		1	貞享3年（1686）	写本	22
584	W.40	神字日文伝（二巻）附疑字篇		3			97
402.9	W.10	鬼神新論	平田篤胤（気吹舎）	1	文化3年（1806）		57
402.5	W.17	天柱五嶽餘論（二巻）	平田篤胤（気吹舎）	2		写本	74
450	6	霊能真柱（二巻）	平田篤胤（気吹舎）	2	文化10年（1813）	江戸　鴨伊兵衛等	114
930.6	W.1	皇国度制考（二巻）附度攷辨	平田篤胤（気吹舎）	2	天保（跋）（1830～1844）		78
664	12	大扶桑国考（二巻）	平田篤胤（気吹舎）	2	明治8年（1875）（跋）	皇学所	81
450	W.8	三五本国考（二巻）	平田篤胤（気吹舎）	2	嘉永2年（1849）（序）		78
450	W.7	心の柱	権田直助	1		東京　神習舎蔵版	22
450	5A	玉鋒物語	矢野玄道（神臣）	1			20
402.5	W.16	伊勢二宮さき竹の辨	本居宣長（鈴酒舎）	1		須受能耶蔵版	45
514.5	W.87	古今集聲句相伝聞書		1		写本	22
402	W.3	倭姫命世記		1	応永25年（1418）（奥書）	写本	44
611	W.6	神武巻（日本書紀巻第三）	舎人親王	1			22
611	80	神代記葦牙（三巻）	栗田土満（岡酒舎）	3	文政2年（1819）（版）		182
611	29	略解古事記（六巻）	多田孝泉	6	明治8年（1875）	京都　永田調兵衛等	346
611	34	鼇頭古事記（三巻）	度会延佳（講吉）校	3	貞享4年（1687）（跋）		113
402.9	W.14	大耶麻謄沙汰文	立石垂穎	2	宝暦8年（1758）	大阪　北田清左衛門	45
727.6	W.1	旧典類纂皇位継承篇（一〇巻）附	横山由清・黒川真頼共編	6	明治11年（1878）	東京　北沢伊八	359
644	W.3	纂輯御系図（二巻）	林道春（羅山）	2	明治10年（1877）	東京　北沢伊八	98
646.3	W.17	京都将軍家譜（二巻）	林道春（羅山）	2			78
648.1	W.14	豊臣秀吉譜（三巻）	林道春（羅山）	3	宝永4年（1707）	京都　平野屋佐兵衛	139
646.3	W.16	鎌倉将軍家譜	林道春（羅山）	1			29
648.1	W.13	織田信長譜	林道春（羅山）	1			49

610.9	5	裏面観的異説日本史	伊藤銀二（銀月）	1	明治42年（1909）		東京　白雲堂、杉本梁江堂	312		
962.5	W.7	名人指南棋鈔本（二巻）附録	本因坊秀哉	2				107		
962.5	W.8	囲碁互先布石攻合法	中川亀三郎	2	大正8年（1919）		東京　大阪屋号	172		
962.5	W.9	原理応用囲碁定石講義	広瀬平治郎	1	大正13年（1924）		東京　斯文館	136		
962.5	W.10	実践鬼手録（題簽、囲碁実践鬼手録）	広瀬平治郎	1	大正13年（1924）		東京　斯文館	47		
962.5	W.11	二子三子新式布石講話	中川亀三郎	2	大正12年（1923）		東京　大阪屋号	147		
258	20	諸経抜粋	日迅編	1	明治23年（1890）		写本	114		
				345						